

令和七年度 鍵谷祭協賛垣生中俳句会（五月） 入賞作品

金賞

母の日や感謝を伝える声変わり

二年

「ありがとう。」普段は恥ずかしくてなかなか言えない言葉。幼いころにはあんなに素直に言えたのに。中学生になってから思っているも素直になれず、時に反発もしてしまう。それでも、いつも見守ってくれる母に一年分の感謝を伝える日です。この句は、切れ字『や』を用いることにより、母の日の情景を想像させる間を読み手に与えようとしているところが巧みです。家庭によって感謝の形は様々です。声が変わるほどに成長した今でも感謝を伝え続ける姿が想像できて微笑ましくなる一句です。



銀賞

新緑に唸り轟くトラクター

三年

厳しい寒さも和らぎ、少しずつ暖かくなってきた今日この頃。地域では田起こしが始まったのでしょうか。華やかに咲いていた桜を筆頭に、様々な「新緑」が見られる中、新たな実りに向けた準備が力強く行われようとしています。聞き流してしまえばただの機械音となるトラクターの音を「唸り轟く」と表現することにより、眠っていた静かな田園地帯へのアラームになっているのでは。コメ不足の打開に向けて、盛んになっていったほしいものです。



銀賞

口の中メロディー奏でる新キャベツ

三年

この作品は面白いな！と感じました。俳句では面白いということも大事なことです。これを俳諧味（はいかいみ）といいます。味わいがあるということです。新キャベツの柔らかく、みずみずしい歯ごたえを「メロディー奏でる」としたところが特にいいです。穏やかな春の日に家族揃って食卓を囲んでいるのでしょうか。和やかで温かな雰囲気が作品を通して伝わってきます。

銅賞

初夏近く学ラン着るか迷う俺

三年

このところ暑すぎるので思わず「学ラン着るか迷う」という気持ちはよくわかります。一人称を「俺」としたところに中学生らしさを見ることができます。身近な題材をすくい上げた中学生らしい作品です。身近な日常の情景と中学生の素直な気持ちが自然に伝わってきます。

銅賞

肌照らす強き日差しに春惜しむ

三年

季節の移ろいは早いもので、校内外では、白いワイシャツやベスト姿が多くなりました。穏やかな春はどこへやら。午後になると「日差し」も徐々に強くなり、外出時には日焼けも気になり始めますね。初夏の気配を、太陽が「照らす」光（視覚）と^{ほて}火照り始めた肌の感覚で捉えた一句です。「春惜しむ」の表現から、移りゆく晩春への愁いを感じます。五感を生かした豊かな感性が魅力的です。

銅賞

花冷えや吐き出す咳と風の音

二年

同じ晩春でも、暑さを感じ始めた前句とは対照的な一句。「花冷え」は、桜の咲く頃に急に寒くなる現象を表す季語です。新しい環境と期待や不安の入り交じった毎日の中で、疲れは付きもの。体調を崩してしまったのでしょうか。「出る」ではなく「吐き出す咳」の言葉選びが効果的です。「風」が花を散らし春が終わる前に、自己治癒力で何とか早く回復したいという心情が伝わります。「咳」は冬の季語ですが、切れの「や」が功を奏し、過ぎゆく春を想う余韻が残る句となりました。

入選

散る桜手のひらすべる風の音

一年

鯉のぼり思わず歌を口ずさむ

一年

風に乗り天をも翔ける鯉のぼり

一年

小学校恋しくなった春の風

一年

散歩道夏と出会って「久しぶり！」

一年

夏近し私と友ののびた影

一年

春の風期待と不安包み込む

一年

新緑に私の成長重ね見る

一年

弟の百日祝い鯛食べる

二年

じいじんち今年も見つけたつばめの巣

二年

母と見る風にゆれてる鯉のぼり

二年

サラダ食ベシヤキツと音なる新キャベツ

二年

山あいひっそり伸びるたけのこの芽

二年

玄関前校舎彩るスイートピー

二年

花は葉に別れ告げし友の声

三年

春風で心落ち着く試合前

三年

雨足に負けぬ一球春の声

三年

毎日の感謝を込めて母の日に

三年

